

三浦梅園と府内の詞友門弟

久多羅木儀一郎

一 首言

三浦梅園は天明三年六十一歳の正月に著わした「慥婉錄」において、府内（大分市）に関係ある説話を二篇収載している。一は瑞光寺の住僧功岳の戒定嚴守、一は古版恩讐の彼方へともいうべき桃路新作の話である。後者は寛文二年刊「為人鈔」より引載したものであるが、瑞光寺功岳のことは、あるいは府内の誰人からか聞き込んだのではなからうか。というのは、府内には梅園の門弟または詞友と見るべき者が、数人いたことからである。

二 小野昌庵

まず第一には府内桜町の医師小野昌庵である。その梅園との交渉は、「三浦梅園書翰集」にある昌庵宛のもの六通、および「梅園詩集」にある二首によつて、よく窺われる。すなわち天明二年壬寅、梅園六十歳のとき次の作がある。（全集下六九〇）

贈三野田昌庵

鶴嶽之東四極峯。波間晴出玉芙蓉。他時未得相携摘。落日蒼烟紫霧重。

これにより当時すでに交遊關係のあつたことが知られる。しかしまだ互に逢つたことはなく、単に手紙の上だけの交際であつた。ところがその後某年二月、梅園が杵築に來たとき、昌庵は同地に往訪して、梅園と親しく会談した。梅園も「始而接高範、猶珍話共承之、慰宿望」と、大いに喜んでゐる。（書翰集二三五）以後両者の交誼は一段と進み、昌庵から禹余糧（泥橘鉄鉞）

三浦梅園と府内の詞友門弟

を贈つたり、詩の添削を乞い等し、梅園からも昌庵に敢語や詩轍、贅語等を贈つてゐる。梅園の手紙の用語から見ると、昌庵は門弟というではなく、賓朋であつたようである。その為めか昌庵は、梅園の茶理學を玩索してはいたが、条理を研究しても医事において發見もないでなかつたかと、随分無遠慮なこともいつてゐる。これは天明四年のことである。(書籍集八〇八)

野君昌庵萱堂八十寿詞

高堂獻壽醉慈親。竹葉桃花相映新。愛日懸知日深日。遊糸晴動彩衣春。

しかし昌庵母堂の八十寿は、脇蘭室の送小野亭叔駕之江都序によると、寛政三年であつた筈であるから、昌庵は寛政元年頃から、梅園はじめ知友に、その寿章を求めていたものと想われる。蘭室から昌庵に贈つた詩文で見ると、昌庵は亭叔、東岳と号したようである。文化二年十二月廿五日歿した。法名を寂然院常也東岳日照という。(本光寺過去帳)蘭室は東岳を追憶して、「東嶽先生何多哀。善書善詩管五絃。医国有志人未識」と讃へてゐる。

三 佐藤卯作

「三浦梅園書翰集」にある前記昌庵の手紙六通の内、その五通までのすべてに、卯作生という名が記され、この者が両者双方の手紙をよく運んでいる。そして卯作生帰省とか、卯作生來遊とか書かれてゐるので、この卯作なる者は、府内から梅園に入門してゐたことが知られる。従つて「梅園詩集」および「梅園詩稿」には、卯作について次の如き作が載つてゐる。

藤卯作吹笛(安永九年)

笛送_二離声_一風自悲。扁舟雪後憶_二歸待_一。江南信断梅花外。独向_二關山月落_一吹。

送_二藤卯作_一(天明五年)

行矣男兒志。生來在_二四方_一。衰遲殘日短。離恨暮雲長。匣劍拭_二星斗_一。玉_二肅試_二鳳皇_一。舞衣被_二錦_一。待爾入_二歸裝_一。

別藤卯作（梅園詩稿）

一從琴酒醉花開。春自相思到草萊。白首明年得無恙。待君琴酒踏花來。

送藤卯作。代男青鶴賦。（同前）

君吹橫笛我吹笙。相送西樓風月清。何又西樓坐風月。君吹橫笛我吹笙。

以て卯作は常に笛を嗜んでいたことが想見される。ところでこの藤卯作は、府内でどういふ身分の者であつたか。これについて引照したいのは、安永七年九月廿三日、府内城大書院において、城主松平近衛の嫡子秀之助（この年八月廿六日出生、後の近賢）の生誕祝を行い、家中ならびに町人の舞囃子を催し、家老、列座、物頭、小姓頭、医師等に見物させたときの、町人組の番組に左の如くあることである。（府内藩日記）

囃子番組

高砂	政太郎	忠次	栄助	シテ	酔屋	同	政太郎		
葎刈	平右衛門	喜惣次	平右衛門	大鼓	掛室	河忠	治	塩屋	三国屋
					六郎右衛門	島屋	半蔵		万次郎
羽衣	政永郎	係十郎	蔵栄助	小鼓	酔屋	喜惣次	七	安屋	
					梅屋	亀屋	孫十郎		
龍田	平右衛門	六郎右衛門	卯作	太鼓	栄助	卯作			
					福島屋	松屋			
猩々	平右衛門	万次郎	宇作	笛	平右衛門	豊助	糺熊	吉	
					橋本屋	萬力屋	掛屋	茶屋	真砂屋
以上				地	八郎兵衛	善作	平太	伝蔵	磯吉

すなわち龍田と猩々の囃子において、太鼓の配役になつている亀屋卯作、これが梅園門下の藤卯作であると思ふのである。

亀屋は竹町の宿老役を世襲した家柄で、姓は佐藤といつた。これで藤卯作と記される由来も、また理会されるのである。この卯作は梅園に入門するほど好学の人であるから、引いて能楽にも趣味を有し、安永七年ごろは太鼓をやつていたが、同九年梅園塾に在る頃からは、笛の方を稽古していたようである。卯作が梅園に従学した期間は、ハッキリわかっている年代を見て、安永九年から天明五年に至る六年に及んでいる。以て町人にはあるが、まこぶる篤学士であつたことが想われる。のちその子孫に佐藤徹翁や、菁々女史の如きが出たのも、また決して所になしとせぬのである。

四、多賀墨卿

天明五年の秋、佐藤卯作は梅園塾に到つて、一訃音を伝えた。梅園大いに驚愕痛惟し、よつて一詩を賦して卯作に託した。すなわち「梅園詩稿」に曰く、

藤卯作来云。多賀墨卿子。以八月而没。予聞之惕焉驚。驚定而淚從之。因賦一詩。託卯作生。以冀其靈之聞之。科斗梵篆亦可疑。疑回元萌垂髫時。試傾乾坤探条理。因知人間未曾窺。誰掃几案任筆書。不求碌々世人知。此草誤落墨卿

手。問難心知不我欺。從是邯鄲江上鯉。春月秋風伝相思。昨夜藤生逢我語。墨卿已葬鄉水湄。墨卿少我心十歲。不意仙遊

驟先期。請子婦到供雞絮。為向墓前誦此辭。梅園にかくの如く痛惜された多賀墨卿も、また府内の人で、字を陽樸といつたらしい。安永六年墨卿は梅園を訪い、贄を執つたと見えて、梅園に左の詩がある。(梅園詩稿)

送多賀陽樸還府内

江山欲曙紫。南指芙蓉出海雲。何日片帆懸画裏。滄浪一曲得尋君。

上掲する二首の詩賦によつて、梅園は碌々たる世人の知るを求めなかつたが、墨卿は当時すでに玄語を読んでいたことが知られる。爾來墨卿は手紙を以て、しばしば梅園に質問し、梅園は墨卿を門弟視せず、同調の士として遇し、三度も長文の答書

を与えている。すなわち通信教育をしているのであるが、その初回は安永六年臘月二日、「支語」に述べてある混沌爵淳の義について、次回は同八年四月望、臙腑の記について、三回目は同九年暮春、神氣本氣の分と、臙は其の系、上は肝臟に属し、下は胃口に著く云々のことについて、答書しているのである。さらに梅園は、高弟矢野雖愚への手紙（全集下七八三、書翰集一四〇）において、贅語中の一篇は未脱稿であるから、他見無用であるが、「多賀氏は同調の義、御膝手に被成可被下候。」と述べ、贅語の未定稿写本を、墨卿には廻送するを許諾している。このようなことから見て、墨卿はいわば塾外生であつたが、梅園が如何に嚮望していたかと、想いやられるのである。

而して右墨卿への答書の全部は、「梅園拾葉」に收められている程に、梅園としても相当に力を入れた記述である。それとゆうも墨郷の質問が、糸理の核心に蝕れている為めであろう。されば前引矢野雖愚宛の書中にも、「墨卿子への答候書ども御覽、思過半候由に候得ば、於拙も基本望の御事奉存候。」とか、また杵築の佐野玄遷への手紙（書翰集二三四）においても、「答多賀墨卿書、貴君には准置不申候や」とある如く、この答書は墨卿以外にも、門下にだん／＼配つたようである。殊にその初度のもは、梅園の哲学思想を、和文で解り易く述べてあるので、三枝博音先生著「三浦梅園の哲学」には、これを現代語に直して載せてある。

さてこの墨卿は、通称を友見といつたと見え、梅園より杵築の須摩屋源助に宛てた手紙（全集下八〇七、書翰集一四九）の中に、「此一通無拠用専申遣候。何卒慥成使奉頼候。尤魚町山田潮庵、是は海老や縁家、いなり町多賀友見、此方にもよく御座候。」とある。稻荷町というは杵築にはないから、この文意は、府内魚町の山田潮庵か稻荷町の多賀友見方に、確かな使に托し送つて貰いたいと、源助に頼んだものである。そこでこれを「府内藩日記」について検索したところ、天明四年正月廿八日、家中の屋敷替が行われたとき、稻荷町の多賀隣徳の屋敷と、同町の柴田六左衛門の屋敷と入替つたとあるから、多賀氏は以前から稻荷町に住していたことが明瞭である。また友見の名は、明和二年八月浜ノ市のと、病病人の救護に備えるため出張させた医師当番覚に、一番安東玄直、二番小野昌庵、三番山田朝庵、四番守田覚庵、五番多賀祐見、六番武田見良と列記さ

れている中に見えている。しかし天明四年正月當時は、友見は隣徳と改名していたのであるうか。長池町善巧寺第七世応信院誓慧は、同年五月廿三日多賀隣徳宅で死亡している。

墨卿は梅園の輓詩にある如く、天明五年八月に歿した。梅園より丁度十歳若かつたというから、享年五十三歳であつた。その後十八年を経た享和三年七月十七日の「府内藩日記」に、多賀友見のことについて次の如く出ている。友見——日記にはこの文字を用いている——は小見科であつた。その歿後、跡継がなかつたと見えて、家方の書物等は、府内惣宿老代松末庄屋渡辺久左衛門が保管した。ところがこの年与屋町守田正賢の弟玄医が、友見の名跡を継いで小見科修業のことを志願したので、藩ではこれを許可して、この日玄医に修業中扶持を給することを遂し、また久左衛門に友見の家方書等を玄医に譲渡させた。この記事によつて、墨卿の歿後、多賀家は一旦廢絶したことがわかる。

五、山田朝庵

次は山田朝庵である。梅園は朝庵を潮庵に作つてゐるが、さきに引いた梅園から須摩屋源助宛の手紙や、明和二年八月の浜ノ市医師当番覚によつて、府内魚町の居住者であることは、すでに説明を要せぬ。「梅園詩稿」に府内の山田運禎また運貞とあるは、恐らく朝庵のことではないかと思ふ。

歳暮喜山田運禎至山（安永四年）

風雪寒山暮。遙思江上梅。故情不相忘。時折一枝來。

これで見ると運貞は、この以前から梅園と交誼を有していたのである。翌年また梅園宅を訪うたと見え、「梅園詩稿」に左の作がある。

送山運貞歸府中（安永五年）

不探驪龍頰下來。清光何得掌中開。江天秋近如珠月。憶子相携時上台。

運貞は梅園宅に滞在中、自家の樓名を臨池館と号しているについて、扁題を乞うたと見えて、「梅園詩集」安永五年の作中に、「遙題山潮庵臨池館（潮巷府内と人）」（全集下六八〇）という長詩が載っている。

けだし朝庵は、梅園の学を研鑽するを主とせず、専ら文雅の道を以て交つたのではないかと思う。その樓名を臨池館と号した点から見て、書道に趣味を有したようである。「府内藩日記」によると、明治二年四月廿三日、朝庵は勢家の春日宮に、春日大明神の額を奉納することとし、その染筆を京都の白川神社伯に依頼した。この額は現に同社に遺存している。またこの前後ごろのことかと思われるが、府内の町中から由原宮に百人武将の絵馬を寄進した。絵は堀川町重助の筆、銘は朝庵の筆である。由原宮ではこれを東西の廻廊にかけてあつたが、年々と損傷するので、天明七年霜月、右の絵を屏風一双に張立てて保存した。朝庵が書を能くしたことは、これらのことでよく立証される。文化九年二月九日歿し、法諡を清春院廓公良然信士という。墓は東新町の大智寺に在る。

六、秦 伯 龍

最後に、いま一人秦伯龍がある。安永八年四月、梅園が多賀墨卿に与えた二度目の答書は、伯龍が梅園塾より帰るとき、托送せられたのであつた。翌九年伯龍は梅園に手紙を致し、今もなお玄語を繕続していることを報じた。これに対して「梅園詩集」に左の作を載せている。

秦伯龍書至。云至_レ今_レ読_レ予_レ所_レ著_レ之_レ玄語_ニ而不_レ捨。因賦贈_レ之。且去年与_レ生別時。予有_下日從_ニ屢氣掃中_一出。山向_ニ沙鷗没処_一浮_レ之_レ句_ヲ。結意取_レ此。以存_ニ懷旧之意_一。川上蓋生所_レ棲之地名。

聞君手不_レ廢_ニ玄經_一。憶昨載_レ罽遊_ニ野亭_一。送_レ望無_レ由到_ニ川上_一。沙鷗没処_ニ亂山青_一。

これに伯龍は川上という地に住すとあるが、府内には左様な地名はない。翻つて「府内藩日記」を見ると、秦姓の医師には、文政四年九月廿四日の条に、永興村に秦純孝というがあり、また元治元年三月十四日の条に、稽全館（医学校）在學生に

秦伯泉というがある。そして秦姓は、今も永興、上村、尼ヶ瀬方面に多いから、川上というは、あるいは上村をもじつた地名ではなからうか。そこでまた想像であるが、伯龍は上村にいたが、その子孫がいつの頃に、永興に転住したものと解するのはどうだろうか。

七、尾語

以上記述するところを、大分市史の上よりいえば、安永天明期における府内文化の一断面を語るものであり、また梅園学よりすれば、その門流の一分布を示すものである。中にも多賀墨卿の如き、梅園門下としては従来あまり知られなかつた高足が、府内にあつたことは、最も注目すべきことである。けだし墨卿は、詩文の方面は兎も角、条理学においては、梅園の高弟中でも、第一人者ではないかとさえ思われるのである。少なくとも梅園門下としては、矢野雖愚、矢野蕉園、脇蘭室、弓崎俊平、青柳元龍らの如きと、肩を並べる一高弟といつてよいかと考えるのである。されば若し墨卿にして、梅園歿後にまで存命であつたならば、よく師の学を継いでこれを紹述し、条理学の講座は、両子山下より府内へ、南遷したかも知れなかつたと、夢想さえ浮ぶのである。故に何とかして墨卿の事歴ならびに業績に関する文献を得たいものと、大分市稻荷町、牧、生石、および大分郡阿南村の小野屋に現住する多賀氏の全部を廻訪したが、遂に徒勞に終つたのであつた。(別大講師)

郷土史話

豊後の練貫酒

京都東福寺の有名な大極蔵主の薯
碧山日録に、豊後の香配の話が見え
る。時は応仁乱の最中(一四六八)で
ある。いわく「西客某来る、欸話の
次でに曰く、豊之後州香酒を出す、
練貫と名づく、その性濃醇にして、
万里を数旬の間に歴と雖も、其の味

変らず、故に中州に至る者、多く之
を載すと云」と。恐らく卯酒の一種
で、渡明の者もこれを舶載したとい
うのである。閑吟集(室町時代の小
謡集)に、

○南陽県の菊の酒のめば、命もい
く薬、七百歳をたもちても、齢
はもとのごとく也、く、

の如く、当時炭坑節の如く津々浦々
で謡われたのも、豊後の練貫酒であ
らうか。国内は勿論、中国にまで輸
出された練貫酒は、江戸時代には博
多の名産となり、本場の方は衰えた
らしい。(渡辺澄夫)